

ザンビアを学ぶ・ザンビアから学ぶ

【実践者】

氏 名	梅村 唯斗	学校名	群馬県高崎市立矢中中学校
担当教科等	社会	対象学年（人数）	2 年 全クラス（117 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2023 年 10 月 25 日～11 月 17 日（4 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：ザンビアを学ぶ・ザンビアから学ぶ

単元目標：ザンビアの状況を通して、今までの日本の見方と違う見方を獲得できるようにする。

関連する学習指導要領上の目標：

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。

03 単元の評価規準

①知識及び技能	探究的な学習過程において、課題の解決に必要な知識や技能を身につけ、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解している。
②思考力、判断力、表現力等	実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現している。
③学びに向かう力、人間性等	探究的な学習に主体的・協働的に取り組もうとしているとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈理由〉

失われた 30 年を経て、日本が「先進国」だと大手を振って言うことができない時代へ突入してきている。日本はいまや「課題先進国」と呼ばれ、先進国の中でも課題が山積している国といえる。しかし、この現状は日本で生活している日本人には簡単に実感することができない点であり、他国の状況と日本の状況を比較し、日本の状況をより客観的に把握することではじめて理解が可能となる。途上国の現状を知り、その現状と日本の状況を比較してみることで、より日本を客観的にとらえ、日本に対する新たな見方を獲得できると考え、本単元を設定した。

〈単元の意義〉

本単元は、途上国の現状を理解することを通して、今までの日本の見方とは違う見方を獲得することを目標としている。途上国の現状、特に自分が教師海外研修で見てきたザンビアという国の実情を通して、日本がどのような状況にあるのか、そして日本はこれからどのような意識を持つべきなのか、という点について、生徒が理解することを目指したい。ザンビアでは途上国としての課題がはっきりと目に見える形であらわれており、写真や動画を通してその現状や解決策について生徒が理解することは可能であると思われる。そして、そこから新たな日本の見方を獲得するために、「ザンビアでのプロジェクトを踏まえて、自分たちにはどんなプロジェクトができそうか？」という問いを投げかけたい。その問いを通して、今までの日本やこれからの日本のあり方を考えていけるのではないかと考えている。以上が本単元の意義である。

〈児童／生徒観〉

本校の生徒は、世界で起きていることに対して少なからず関心を抱いている。自分がザンビアへ行くことを告げ、文房具の寄付を募ったところ、多くの生徒が文房具を持参してきてくれた。しかし、その世界で起きていることと自分とがどのようにつながっているかについて深く理解している生徒は少ない。途上国の現状を通して、世界と自分とのつながりについて実感をともなって理解できるように促していきたい。

〈指導観〉

教師海外研修の体験を踏まえた指導を行っていきたいが、「学習する生徒は現地へ行っていない」という明確な点を踏まえた指導を心がけていきたい。こちらからの説明はなるべく控えながら、現地での写真や動画、諸資料を生徒が読み取り、そこでの様子がどうなっているのか、想像力をはたらかせながら、活発に意見や考えを出せるように促し、その考えをもとに生徒同士で議論をしながら、より深い考えを持つことができるような指導を心がけたい。

05 単元計画（全4時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	「ザンパ ラクイズで途 上国を知ろ う」	ザンパ ラクイズから、 途上国の現状を理解す る。	○ザンビア・パラグアイについて知って いたことを書き出し、共有する。 ○ザンパ ラクイズに答えながら、ザンビ ア・パラグアイについての理解を深め る。 ○ザンビア・パラグアイについてもっと 学んでみたいことを書き出し、共有す る。	○「ザンパ ラクイズ」スラ イド資料
2	「ザンビア とつな がろう」	ザンビアの学生とのオ ンラインでの交流を通 して、途上国の現状をよ り深く理解する。	○お互いの生活についてスライドを用 いて紹介しあう。 ○スライドで学んだこと以外に気にな った点を質問しあう。 ○お互いの自国の文化を実際に見せ合 う（ダンス・合唱）。	○紹介用スライド資料
3 本時	「ザンビア の現状から日本を 学ぼう①」	ザンビアの現状を、「ナ カラプロジェクト」「 きれいなまちプロジ ェクト」「丸森町プロジ ェクト」の3つの JICA のプロジェクトを中心 に理解する。	○知識構成型ジグソー法により、以下の 学習を行っていく。 ①今までの学びで思い描くザンビア のイメージを書き出す。 ②エキスパート活動を通して、3つの 活動についてより深く理解していく。 ③ジグソー活動により、3つの活動の	○研修時の現地での写真 ○学習プリント

			内容を共有し、どの活動がザンビアにとって最も必要な活動か、班で話し合う。	
4	「ザンビアの現状から日本を学ぼう②」	ザンビアでの3つのJICAのプロジェクトを通して、今までの日本と違う見方を獲得できるようにする。	○知識構成型ジグソー法により、以下の学習を前時から引き続き行っていく。 ④クロストークの時間を通して、班の意見を共有する。 ⑤クロストークまでの活動を踏まえて、自分たちの身近でどんなプロジェクトができそうか、班で考える。 ⑥すべての活動を振り返り、新たに気づいたことや感じたことを書き出す。	○研修時の現地での写真 ○学習プリント

06 本時の展開（3時間目）

本時のねらい：ザンビアの現状を、知識構成型ジグソー法のジグソー活動までの学習を行いながら、「ナカラプロジェクト」「きれいなまちプロジェクト」「丸森町プロジェクト」の3つのJICAプロジェクトを通して理解する。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	○本時の学習内容をつかむ。 ・今までの学びで思い描くザンビアのイメージを書き出す。 ・教師の説明から、JICAという組織が国際協力活動を行っていることを知る。 ・教師が視察してきた3つのプロジェクトを簡単に説明しつつ、「ザンビアの現状はどのようなものか？」という本時の課題をつかむ。	・写真や動画を活用して、現地での活動をイメージしやすくする。	・研修中に撮影した写真 ・学習プリント
本時の課題「ザンビアの現状は、どのようなものか？」			
展開 (35分)	○知識構成型ジグソー法のジグソー活動までの過程を通して、ザンビアで行われているJICAの3つのプロジェクトについて理解する。 ・3つのプロジェクトをより深く理解するために、エキスパート班に分かれて、それぞれのプロジェクトの資料を読み取っていく。 ①どんな課題がありそうか？ ②課題の解決のためにどんなことをやっていたそうか？ ③課題が解決するとどんなよいことがありそうか？	・教師が自ら説明することは極力避け、生徒が質問してきた内容についてのみ答えるようにすることで、生徒が自分自身の力で資料を読み取れるようにする。	・研修中に撮影した写真 ・学習プリント

まとめ (5分)	・ジグソー班になり、プロジェクトの内容を共有したうえで、どのプロジェクトが最もザンビアに必要なと思うか、班で話し合う。 ○本時のまとめを行い、次回の学習の見通しを持つ。 ・次回の学習の連絡を行い、本時の学習が次回の学習へどのようにつながるのか、その見通しを持つ。		・学習プリント
-------------	---	--	---------

07 板書計画

なし

08 評価規準に基づく本時の評価方法

知識及び技能において、ザンビアでの課題やその解決策を、資料から適切に読み取れているかどうか、学習プリントの記述内容から評価を行う。

09 学校外との連携

特になし

10 学びの軌跡

単元最後の授業での振り返りの記述を載せる。

ザンビアにはさまざまな課題があることがわかった。その課題を解決するためにさまざまなプロジェクトがあることがわかった。ザンビアの人と、日本の人と協力して問題を解決することは大切だと思った。

日本とザンビア 協力して
課題を解決していくから
いいなと思いました。

以上の記述のように、ザンビアと日本が協力して課題解決に向かっていくとよいという内容が書けていた生徒がいたのはこの授業の成果といえよう。

ザンビアでは、様々な問題を解決するためにいろいろな活動をして、ザンビアをより良くしようとしていることがわかった。また、ザンビアで行われている活動はどの国でも必要な考え方であり、応用できると思った。

教育の発達や産業の発展から様々な課題を解決することかできると知りました。
ザンビアは課題がたいていあり、日本にもたいてい課題があることを知りました。

日本とザンビアは全く違う国のようで、実は似ている部分がある、なに
かザンビアは日本に、日本はザンビアに学んでいることがあるのではないかと考えた。

また以上のように、お互いに協力するという内容までいかないまでも、日本はザンビアから学ぶ必要があるという内容の記述も多かった。

ザンビアは色々不足している国だと知った。

ザンビアはゴミの量が多かったので処理したほうがいいと思った。

しかし、以上のようなザンビアの課題にのみ注目した記述も多かった。次回への課題としたい。

日本は住みやすい国なのを知っていたけれど、ザンビアには
日本に比べると色々な課題があり改めて日本は住みや
い国だと思った。

日本がずっと発展しているが逆に発展していない
国を支える必要があることがわかった。

また、以上のように「日本はとても過ごしやすい国」「自分たちがいかに幸せかということがわかった」などの、今までの日本の見方と変わらない内容も多く見受けられた。

ザンビアは、教育や環境があまり発展していない国、ということを知ることができました。
少しでも貢献していけたらいいなと思います。

ザンビアには、様々な課題があることに気が付かされた。
そして、それを解決するためにプロジェクトをしていて、自分にも貢献できていることが分かった
と思った。

以上のような、途上国のために自分たちにできることをしたいといった内容もいくつか見受けられた。一方向的な国際協力の見方になっている記述で、こういった記述の生徒の国際協力・国際支援の見方をいかに双方向的な見方に変えられるかは今後の課題といえる。

ザンビアにはさまざまな課題があり、それを解決することはとても難しく、
さまざまな観点からも見ないと笑えないものもある。また、文化の違いで
感覚的にわかりづらいものもあるのだ；ザンビアの人たちの気持ち
を理解するのは大変だと思った。

また、わずかではあるが、自分のものの見方を客観的にとらえる必要性に言及している生徒もいた。こういった記述の生徒が、今後日本を様々な視点で見えていけるように、こちらからも働きかけをしていきたいと感じている。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

海外研修で特に学んだことは、日本が今どういう状況なのか、ということを経験から見る
ことの大切さである。ザンビアの課題をこの目で見たときに、結局同じような課題を日本も抱えて
いるということ、そして、その課題の解決には、途上国・先進国といった垣根をこえた国際協力・
国際支援が必要であるということを痛感した。生徒たちには、自分たちが持っていた今までの日本
の見方が「先進国としての日本」という偏った見方であったということ、そして、国際協力・国際
支援というものは決して一方向的なものでなく、双方向的なもので、途上国も先進国もお互いに共
通の課題を解決するパートナーであるという認識を持たせられるように促したいと思い、実践に臨
んだ。

12 苦労した点

海外研修で学んだことを材料に授業をするときに、実際に体験してきた自分と、自分の目で見
ていない生徒との間をどのように埋めたらよいか、という点が一番苦労した。授業の初期段階の構
想では、もっと写真や資料を増やし、教師からの説明も多くする予定だった。しかし、様々な方々
からのご意見で、こちらが語れば語るほど生徒たちは引いていってしまう、という重要な事
実に気づかされた。そこからは、いかに授業で使用する資料を絞るべきか、という点に多く時
間を割くようになった。

こちらが意図する内容を生徒がつかめるような資料はどれか、またどのようなキャプションを入れたら、生徒の思考を促せるか、選定に非常に時間がかかった。

また授業実践全体を通して、関係者との日程調整も苦労した点である。授業見学の調整、リモート授業の調整、ザンビアとのオンライン授業の調整と様々な調整に時間をかけすぎてしまった結果、多くの方々にご迷惑をおかけすることとなってしまった。

13 改善点

苦労した点で先述したが、資料の選定に時間をかけた分、「もっとこの資料を使えば…」「もっとこのキャプションを入れたら…」という気持ちも大きい。知識構成型ジグソー法は、エキスパート資料の質で授業全体の質が大きく左右されるが、今回の授業も資料の選定にはまだまだ改善の余地があったと感じている。今後同じような授業実践を行うときは、さらなる資料の精選を行っていききたい。また、調整に時間をかけすぎてしまった点も、自分が不慣れであったということが一番の要因なので、この経験を生かして、次回からはより手際よく、効率的に調整を進めていきたい。

また、新たな日本の見方を獲得する目的で投げかけた「ザンビアでのプロジェクトを踏まえて、自分たちにはどのようなプロジェクトができそうか？」という問いが、その答え方の間口の広さゆえ、生徒を困惑させている様子が散見された。この問いは生徒の実態に応じて、どこまで初めから授業者側がプロジェクトの設定を行うのか（時間や場所、実現可能性など）という点が非常に重要な部分で、その設定を間違えてしまうと、生徒の思考が促されなくなってしまうということが今回の実践で明らかとなった。今後の実践では、対象生徒の実態をよく把握したうえで、適切な問いの投げかけを行っていききたい。

14 成果が出た点

生徒の様子と、学校全体の様子の2点に分けて述べていきたい。1点目は生徒の様子である。資料を精選したことで、生徒たちが活発に思考を働かせる活動にすることができたと感じている。日本の様子とかけ離れた状況の写真を目の前に、生徒たちは今までの自分の知識をフル活用させ、ザンビアの状況について思考を働かせていた。実践前は、「そもそも途上国とは？」という疑問を持っていた生徒たちが、途上国に対して主体的に関わるようになっていった点は大きな成果として挙げられる。

2点目は学校全体の様子である。学校全体の雰囲気にわずかながら、「自分たちは途上国とつながっている」という雰囲気を作り出すことができたと感じている。職員に対しての研修報告会では、多くの先生方に参加していただき、たくさんの質問を受けながら和やかな雰囲気のもと行うことができた。また、他学年の先生方からも「研修で学んだことをぜひ生徒に伝えてほしい」と依頼を受けた。さらには、学校図書館指導員の先生にも「そういったコーナーをつくらないか？」とお誘いを受け、非常に簡易的ではあるものの、図書館の一部に海外研修の学びを踏まえたコーナーを設置していただいた。そのような形で少しずつではあるが、学校全体に国際協力・国際支援の雰囲気が広めることができたと思う。

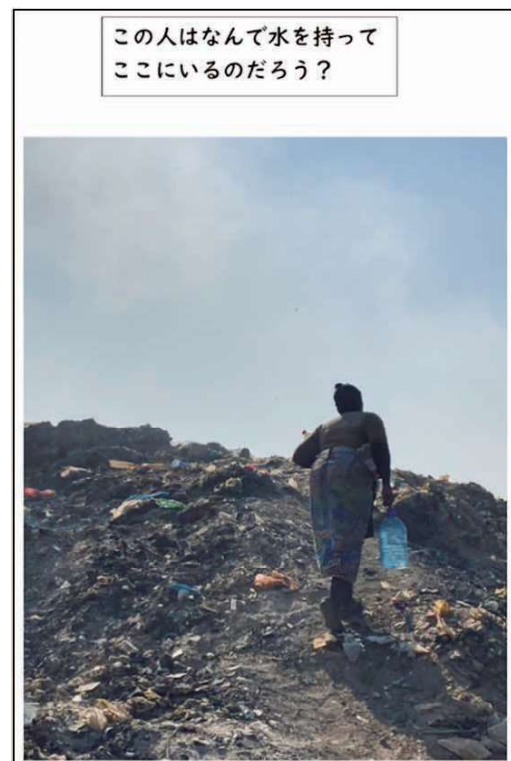
15 自由記述

今回の研修の1番の成果は、なんといっても同じ志を持つ仲間に出会えたことである。なかなか身近に国際協力などに興味を持っている教師は少ない。自分がやっていることが間違っていたり、正し

くないのではと考えてしまったりすることも多い。そのようなとき、相談できたり、共に課題を共有できたり、課題解決のための授業づくりを共に行ったりできる仲間がいることはこの上なく心強いし、有り難いことである。帰国後、授業の構想を練っていく際も、チームのメンバーをはじめ、多くの方々にご協力いただきながら、少しずつ進めていくことができた。そういったつながりがなければ、今回の研修は成立しなかったということをはっきりと感じている。今回できたこのつながりは、これからの教員人生の宝となるものである。このような宝を与えてくれる貴重な経験の場を用意していただいた JICA の皆様に本当に感謝したい。

参考資料 (エキスパート活動で使用した写真)

資料 A：きれいなまちプロジェクト（廃棄物最終処分場での国際協力事業）



資料B：ナカラプロジェクト（経済的に困難を抱える地域でのコミュニティースクールでの活動）



資料C：丸森町プロジェクト（宮城県丸森町による、現地の小規模農家に向けた草の根事業）

